
片翼の鶴は、空を翔べるのか？

しおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片翼の鶴は、空を翔べるのか？

【Nコード】

N5554X

【作者名】

しおん

【あらすじ】

高跳び選手だった『橋屋 空良』（ハシヤ ソラ）は、事故で左足をなくした。

慣れない義足での生活の中、ある日ソラは事故現場にいた。

どうしよもない絶望と悲しみの中、ソラの目の前に一人の騎士が現れた。

そして、次の瞬間…ソラは異世界にいたのだった…。

この物語は、一人ボケ&ツツコミの少女と、超俺様系騎士

がときにシリアス、ときにギャグ、ときに恋愛と…本当の愛について考えてくという…青春チックな魔法ファンタジーです。

作者のその日のテンションと気分でキャラ達の性格が変わったり変わらなかったり…

適当過ぎる物語です。

ブローグ

それは…絶望だった。

高校の秋の新人戦前日。

いつもより帰宅時間が遅くなり、夕日が沈んだ直後。

出会い頭にトラックと衝突。私は新人戦に出られなかった。

でも、私にとって重要なのはそこじゃない。

私は…

左足を失った。

私は陸上部に所属してる。
主に走り高跳びだ。

中学の最後の大会で優秀な成績を残した私は、スポーツ推薦で陸上競技部で有名な『翠林高校』に入学した。

一年生ながら、私は部内でも指折りの高跳び選手だった。
自画自賛と言われようが、これは事実。実際、記録は一年生の中でも秀でていた。

私自身も、自分の実力に自信があった。
高く跳べば跳ぶほど、空にまた一步近づけるような気がして…楽しかった。

記録が伸びる度に、また一步空に近づく。

幼い頃から好きだった空に、また一步近づく。

これが…私の幸せ…だった。

退院後、私は陸上部を辞めた。

それから、走ることも…空を眺めることも…陸上を思い出すようなことから、一切の縁を切った。友人達は、なるべくその話題には触れず、部活の仲間も気を使っているのか、私から離れていった。

私はただ……リハビリに専念した。

そんな事件から2ヶ月。

季節は冬の始まりを予感する11月。

場所は、私があの日事故に合った場所だ。

1・転機

今の自分の心境に名前をつけるならこうだろう。

…『最悪』だ。

委員会の仕事でついつい帰りが遅くなってしまった。
日の入りも早くなり、辺りは真っ暗だ。

プロローグを呼んだ人なら事情は解るだろうが、私には左足が無い。
い。

大抵の親なら車で送り迎えをと思うが、あいにく私には親もいない天涯孤独の身。

今は孤児院に暮らしている。

という訳で、私は事故の後も歩いて通学している。

幸い、進学先は近所だった為通学には困らないが…今日のような日は困る。

最も、それが災いでこんな体になってしまったが…。

——— にはともあれ、また事故って『両足なくしました』。(笑)
『なんてことになったら……笑えねーよ!! つか、(笑)じゃねーよ!!』

心の中で自分の考えにツツコミをいれると…気がつく、例の事故現場に差し掛かった。

用心しながら足を踏み入れると……

ピカッ

一瞬、自分の半径1メートル以内が白光に包まれた。

何が起こったか分からず、とっさに目を閉じた。

数秒後、再び目をあけるとそこには、一人の青年が膝まづいていた。

青年はゆっくりと顔をあげた。

髪は青に近い紺色で、瞳は夕焼けのような淡い橙色。整った顔立ちをしたイケメンさんだ。

服装は、中世ヨーロッパの騎士を思わせる赤い軍服。腰には剣も装備してある。左肩にはスカンジナビアの腕章が…。

——何…アレ。コスプレ？

互いにしばらく見つめあったのち、青年は口を開いた。

「橋屋 空良だな。」

「…なんで私の名前を？」

青年は質問には答えず、無表情のまま私の肩に手をおいた。

そのままゆっくりと、呪文らしき言葉を唱えた。

「異世界との扉をつなぐ番人、ロジャループよ。我ルイードの名の元、あるべき世界を示せ。トランスファー空間移動!!」

青年の掛け声と共に目映い光が私たちを包んだ。

私はあまりの出来事にただ流れに身を任せていたが、白光が私たちを包んだ瞬間、私の左足は急に体重を支えきれなくなり、私はそのままバランスを崩した。

「うわっ!!」

青年の手が肩から落ちそうになった瞬間、青年は私の体を支えた。

「バカッ!! 危ないから俺様から離れんな!!」

先ほどの無表情とはうって変わり、焦った表情で怒鳴った。

—— オイ… 初対面の相手に向かって…。
大体こうなったのはこの人の責任じゃ…。

そうこうしていると、もう一度辺りは強い光に包まれた。

あまりの眩しさに目を閉じたあと、私はそのまま気を失ってしまった…。

2 愛する人

ソラが意識を失っている間、話は十年ほどさかのぼる…。

ある世界、ある国に一人の少年がいた。

少年は幼い頃母親を亡くし、父親と五つ年上の兄と暮らしていた。少年は将軍である父親を尊敬し、剣の才能をもった兄を尊敬した。

少年は二人が大好きだったし、二人も少年を大切にした。

だが…、当時少年のいた国は隣国と戦争の真っ最中。父親不在がよくあった。

少年はどうして父親がいないのか、よく兄や使用人に聞いたが、誰も教えてはくれなかった。

——誰も教えてくれないってことは…僕がまだ子どもだから…。

そう考えた少年は、いつしか兄のような剣士になる夢を持つようになった。

しかし、戦況は悪化するばかりで、父親が帰ってくる日はなかなか

が無かった。

少年は一人ぼっちでいることが多くなった。

父親が庶民出の成り上がり貴族なため、同年代の貴族の友達はほとんどいなかった。

少年はよく教会に行った。

教会にある書物をよく読んでいた。

幼い頃母親によく物語を聞かされた少年は、本が大好きだった。

ある日、教会の神父は言った。

「そなたには、とてつもない膨大な力をもつ素質がある。だが、その力はあまりに強大過ぎる…。己では抑えきれないくらいの…。」

力。

それは少年が将来もつ魔力。

少年には、魔力をもつ素質があった。

「なら、どうしたらいいんですか？」

「…愛する人を見つけないさい。そなたのもつ力は愛する人を守る為にあるもの。今はまだ理解するのには早いが…いずれわかるであろう…。」

神父の言う通り、少年がその言葉を理解するのはまだ先のことであった…。

三年後、兄は戦場へと旅立った。

長男である彼が、何故自ら戦いに出たかったのか、少年には理解出来なかった。

本来、戦場に出る貴族は次男、三男の役目…。
家督を継ぐ長男は出なくとも良かったのだ。

「何故です！！何故兄上が戦場に行くのです！！私が…私がまだ子どもだからですか？」

「違う。それは違うよ…。私はただ…愛する人を守る為に戦場に行くんだ。」

「えっ…？」

「以前、教会の神父が言ってただろう。私にはやっとその言葉の真意が解ったのだよ。」

「僕は…僕にとって、兄上と父上が愛する人です！！」

兄は少し困ったような笑顔を見せた。

「君にはまだ少し早すぎたかな？」

「愛する人というのは…そういう意味じゃないんだ。」

兄は最後まで真意を伝えてくれなかった。

ただひとつ。少年に解ったのは、兄は何か理由があって自ら戦いに行ったことだった…。

そして一年後…。

戦いは王の急死を機に休戦という形をとった。

少年は父親と兄の帰りを楽しみ待っていた。

一年間。少年は剣の修行をひたすら行った。
大好きな父親と兄に褒めてもらうために…。

だが…帰ってきたのは、戦いに傷ついた父親だけだった。

「父上…兄上は？」

「…お前の兄上は……戦いの途中行方不明になった…。」

大好きだった兄の行方不明。

この事実が少年の今後を大きく狂わせた…。

二年後、行方不明となった兄の代わりに少年が家督を継ぐことになった。

家督を継ぐにあたり、少年は神からの祝福を受け、魔力を手にした。

更に、三年間魔力を扱いを学院で学んだのち、少年は王宮の女王陛下の近衛隊に入った。

そして現在、少年は立派な青年となり、若冠十七歳にして近衛隊長に任命された。

それが現在の『ルイード・ジエネソン』の誕生であった…。

3 見知らぬ空

目が覚めると、そこは異世界だった…。

天井は見慣れた木目ではなく、お姫様ベッドの天井。
私が寝てるベッドも、二人ぐらい横になれる広さだ。

——…ナニコレ。ギャグ？嫌がらせ？

しばらく状況を把握出来ず、気を失う前を記憶を無理やり引っ張り出してみた。

——えーっと…学校から帰る途中、コスプレイケメンに会って…あっ！…！！

ソラはここで大事なことに気づいた。

——義足！…！！

あわててベッドから両足を出してみると…やはり左足はなかった。

おそらく、あの時に何らかの衝撃によって壊れたのであろう。

あまりの事実にソラは言葉を失った。

仮にここが異世界だとしたら、この世界に義足はあるのか？

今のソラの脳内はそれだけだった。

——もうここがどこでも構わない！！
とにかく今はなんとしても動く手段を考えなくては…。

ソラが片足立ちをして立ったその時だ。

ガチャッ

ソラが立ち上がったタイミングを見計らったように、部屋の扉が開いた。

「おはようございます。ソラ様。私は使用人の『リーズ』でございます。」

入ってきたのは、一人の女性。だいたい二十歳前後だろうか。

「あつ…おはようございます。」

一歩遅れて私も挨拶をすると、リーズは少し驚いたがすぐに優しくうな微笑みをみせた。

「朝食をこちらに運ぶので少し待っていてください。」

「いつ、いえ！！大丈夫です！！」

これくらい片足ケンケンでなんとか…。」

「ご無理なさらないでください。すぐお持ちいたしますので。」

ある意味有無を言わせないオーラのまま、部屋を出ていつてしまったので、私は仕方なしにベッドに座った。

ふと足元を見ると、そこには私の鞆があった。

おそらく一緒に持ってきてくれたのであろう。

中に入れてた携帯を取り出すと、そこにあり得ない文字が…

「えっ…圏外??」

現代の日本において圏外になるところはそうそうない。

山や地下ならまだ可能性はあるが、窓から暖かな光を感じるので少なくとも地下ではない。

うん。断言できる。

一応確認すべく窓に近づき、外を見た。

するとそこは見たことない街並みが広がっていた。

昔見た中世の世界を舞台としたアニメのような…。

——山じゃないか…って問題はそこじゃない!!!

これはもう確信した。

ここはやっぱり…異世界だ。

ソラが一人あわてている一方、ルードは朝からイライラしてい

た。

「たつく… ホント能無しばかりだ。」

ルイードは会議場の警護をしていた。

だが、目の前で繰り広げられる光景は、あまりにも無意味なものだった。

グレジデント王国は、君主制の下、議会は一院制の審議院と王によって構成される。

もつとも、最終的に判断を下すのは王にあるが。

審議院には、上流貴族と軍の役職に就いてる家から四十人王家から指名される。

だが、上流貴族は己の富を蓄える者や、地位と権力に貪欲な者達ばかりで、軍に至っては政治に無関心な者ばかり。

この会議自体が不必要なのである。

更に、追い討ちをかけるように女王の病气。

上から圧力をかける者のいない中、彼らはやりたいほうだいだ。

事実、ルイードの父親も軍の仕事が忙しいを理由に、ここ数ヶ月までもに議会に出席してない。

故に、ジェネソン家のことなど誰もお構い無しだ。

そんな彼らが何を討論してるかと言つと…

ソラのことだ。

彼らはソラが現れたことで、次の王位継承をソラか、女王の弟のどちらにするか、争っている。

何故、ソラに王位継承権があるかは、深い訳があった…。

まあ、その話はおいおい…。

父親と違い政治にも関心があったルイードは、話し合いに加わりたかったが…

——この能無しの豚共と話し合いなんか、するだけ時間の無駄だ。

そう考えて、警護に徹したのだった。

——でも、こんな奴らに俺様の警護なんか必要ねえだろ。

本来ならば、女王陛下の身を守る為、最も近くにいないではならないルイードが、ここに居る理由はただひとつ。

女王陛下のご命令だから。

直接的に言われたのは、「議会の警護」だが、おそらくその言葉の裏にはある思いがあると、ルイードは考えた。

それが、ルイードに課せられた本来の使命。

情報収集だ。

病気で床にふせてる女王陛下に報告される議会は、おそらく全て都合の良いようにされた偽装書類。

とつとと摘発すれば良いが…それが出来ればルードはここにいない。

仮に摘発したとしても、おそらく検査院も貴族達の毒牙に犯されているだろう。

——今のグレジデント王国はホントに腐ってる。
早急に手を打たねば…。

時として同じ頃、ソラはある人物に会っていた。

4 私知らない新事実

朝食を終えたソラに、とある人物が面会を求めた。

ソラとしては少しでもこの世界の情報が欲しいし、何より自分の存在を知ってるということは、自分をこの世界に呼んだ理由も少しは知ってるはずと、考えたからである。

着替えとして、リーズから白とピンクのストライプ柄のドレスを受け取った。

丈の長さは膝下だが、白いレースが沢山ついており、どう考えてもロリータ受けしやすいドレスだ。

「もっと、シンプルなドレスはありませんか?? (汗)」

「いえいえ。ソラ様のような可愛らしい顔立ちの方には、こちらの方がよくお似合いですよ。」

そうなのだ。

ソラは部活の時以外は大抵髪をおろしているため、その丸顔がよく強調される。

元々若く見られる日本人顔にプラスαなので、ソラは年相応に見られることはまず無い。

ちなみに最低で小学五年生に見間違われたことがある。

「それに最近、市井の娘達の間でこの形のが流行っているらしいですよ。」

腑に落ちないソラをなだめるように、リーズは優しくつけたした。

結局、ソラの根負けでリーズに言われたようにドレスを着た。

移動の際、ソラはリーズからもらった松葉杖で、その人物が待つ応接室に向かった。

廊下を歩いてる時、とにかく今自分があるこの建物は何かを、視界に入る情報から推測していた。

——元の世界を基準に考えたら…中世のヨーロッパの屋敷かな???

こうしてソラは応接室に向かった。

「お初に御目にかかります。ソラ様。
私は宰相の『ユーデリカ・アンジャビス』。『ユーリ』とお呼び
ください。」

私を待っていたのは男装をした、一人の女性だ。

メガネをかけた知的美人で、髪を一本の三つ編みにいてある。

「はじめまして。橋屋 空良です。」

緊張していたのが相手に解ったのか、ユーリは柔和な笑顔で微笑んだ。

「大丈夫ですよ。そんなに緊張しなくとも。私は貴女の味方です。」

そう言ってもらって、ようやく緊張がほぐれてきた。

男装をしている理由を尋ねてみると…

「ドレスのまま仕事するのは何かと都合が悪いですからね。」

という返答が返ってきた。

——まあ、納得するわ。

「それでは、まず初めに私達のいるこの国について簡単に説明いたします。」

ユーリの説明をまとめると以下のようなものだ。

私達のいるこの建物は、グレジデント王国の後宮。すなわち、王の家族の居住スペースだ。

この国は立憲君主制の下、女王が治める大国らしい。

世界の五大大国入るくらいだ。

だが、最近は国内での貴族同士の揉め事や、戦争や政治に関する不満で小さな反乱があったりして、その座も危うい。

更に、トップに君臨する女王が病に侵され貴族達は好き勝手し放題。
題。

まさに、グレジデント王国は崩壊直前の危機なのだ。

——まてまて…。どうして私にそんな国のいざこざまで話す…。
…もしかして、私にこの国を立て直して欲しいとか？（笑）
いやいや。さすがにそんなアホみたいな話が…

「そうです…！」

私達はソラ様にこの国を立て直していただくために、呼び出した
のですっ…！」

——そんな話があつたああああ…！？？

「ちょ…何で私の心の中がわかるの…？」

「読心術です。」

キツパリとユーリは答えた。

——この人は一体何者！？

「で…でも…！私はただの人間だし…そういうのは他の王族の方に
…。」

そこまで言うと、ユーリは少し真剣な眼差しを向けた。

「ソラ様。その事については心配ご無用です。
いきなり私の口から言うのも、恐れ入りますが…時は一刻を争い
ます。」

真剣な姿で言うので、自然とソラの中にも緊張が走った。

「ソラ様。

貴女は…我がグレジデント王家の直系のご息女。
今は亡き賢明王の第一王女でございます。」

私は、異世界の姫だった…。

5 お母さん

「私が…異世界のオヒメさま？」

『お姫様』の部分でつい声が裏返ってしまったが、ユーリは構わず頷いた。

——あり得ない。

そんな非現実的なことがあるわけ……って、この世界に來た時点で非現実的か。

しかし、一つ腑におちない点があった。

それは容姿だ。

ユーリやリーズを例に、彼女らは元の世界でいう欧米風。すなわち、西洋系の容姿をもっている。

対する私はどう考えても東洋系。あえてゆうなら、普通より少し肌が白いだけ！！

黒髪黒目とかはもう…アジア人の証であろう。

——つか、それならアジア人の女の子みんなお姫様候補なのでわ…？

「いえ。そんなことはございません。」

「Σまた、読心術！？」

「いえ。今のは声に出ていらしたので。」

「Σマジで!？」

「先ほども申した通り、ソラ様は間違いなく王家の人間ですし、この世界の人間です。」

その証拠に、ソラ様からは強大な魔力をもつ素質を感じます。」

「でも私魔法なんて使えないよ!!」

「それはそうです。」

ソラ様から感じるのは、あくまで素質でありまして、魔力自体は感じません。

この世界で魔力を得るには、二つの要素が必要です。

一つは素質。

その者に魔力をもつ器があるかないかです。

器は一生涯その大きさは変わりません。

そして器の大きさを知るのは、己の限界を知るのも同然です。

しかし、その器にも大きすぎても、それは逆に暴走する危険性が高いことも意味します。

でも、それは王族には関係ありません。王族はそれを抑えるだけの精神力が元から備わっているわけでした…。

まあ…一部例外もございますが…。

二つ目は、祝福です。

これは素質がある上でのことです。

この世界の『始まりの神』と呼ばれる四人の神から、祝福を受け

る儀式を行うこと差します。

素質のある者は、祝福を受ける以前から四人の神から何らかの影響を受けたりもします。

以上が、魔力を得る為の要素です。

ソラ様の場合、祝福はまだ受けていないので、魔法は使えないのでしょう。」

そこまで言うと、ユーリは一人で納得したようになっていた。

——…この人、見た目とのギャップが激しいな…。

「魔法のことは理解したけど（一応）、容姿についてはどうなの？」

ユーリは少し考えて、立ち上がった。

「口で説明するより、見た方が早いです。」

そう言うと、私をある場所まで案内した…。

「こちらです。」

後宮の一番奥の部屋。

厳重に警備された扉の前に私達はいた。

「この部屋は？」

「女王陛下の…ソラ様のお母上。『フィアーナ・レシアル・グレジデント』様の寢所です。」

いわゆる、女王陛下のお部屋だった…。

「まてまて。（汗）」

いきなり実の母親に会うとか…ハードル高くない!？」

「大丈夫ですよ。」

女王陛下も早く会いたいでしょし。

それに…。」

ユーリは、少し躊躇い接続語を言ったのはなかったことにした。

——なんか今変に違和感が…。

だがソラは余りツツコミを入れなかった。

部屋はソラが使っている部屋とは比べほどにならないくらい、広い部屋だ。

ソラの部屋は、客間のような最低限必要なモノしか無いのに対し、この部屋はカーテンのかかっている大きなベッド以外、シックな家具で揃えられた、落ち着く部屋だ。

「…誰？」

カーテンで閉め切ったベッドから声が聴こえた。

「ユーデリカでございます。女王陛下。」

「あら、ユーリ。どうしたの？」

「はい。本日は、あるお方をこちらの部屋にご案内いたしました。」

「……もしかして……」

ガラッ

カーテンを開け、中から顔を出したのは……自分とそっくりの黒髪黒目の人。アジア系の顔立ちをもっている。

元気だったらすごい美人なのに、病気だからか肌が青白く、どこか幸薄い感が漂う……。

「ソラシア……。」

そう言つと、ベッドから立ち上がり抱きついてきた。

どう対処すればいいかわからなくされるがままだったが、その人は泣いていた。

耳元で何度も「ごめんなさい。」と謝っていた。

「ごめんなさい、ソラシア。15年間、貴女に寂しい思いをさせてしまつて…。母親失格よね…。」

「そんなことないっ！！そんなこと…ないよ。…お母さん。」

15年。

本当の親の存在すら知らなかった私は、自分を不幸とは一度も思わなかった。

それは一重に自分の周りが優しい人ばかりだったからだと思う。孤児院のおじさんやおばさんは私のことや他の子のことを本当の子供のように接してくれたし、孤児院の仲間も兄弟のように仲が良かった。

私は一人じゃなかった…。

孤児院にいた時間は決して、無駄じゃなかったと思う。

むしろ感謝してる。

おそらく、この世界でぬくぬくと『オヒメサマ』として暮らすより、ずっとずっと良かったと思う。

でも。

お母さんはどうだろう。

15年間、離ればなれに暮らして寂しくなかったのだろうか…。

そもそも、どうして私は異世界に行く羽目になったのか…。そして、どうやって私を見つけたのか…。

私はそれが知りたかった。

「お母さん…。どうして…。どうして私は、お母さんと離ればなれになっちゃったんですか…？」

少しの沈黙の後、お母さんに代わってユーリが口を開いた。

「…15年前、この国に大事件が起きました…。」

6・15年の愛、その1（前書き）

女王陛下とソラの親子編

6・15年の愛／その1

それは、15年前のよく晴れた日。この国に新しい命が誕生した。産まれたばかりの赤ん坊は、この世界の古語から『ソラシア』と名付けられた。

意味は『羽ばたき』。己の力で羽ばたけるように育て欲しいから、命名された。

いずれは一国の頂点として君臨する為に…。

だが当時この国は、隣国との戦いの真っ最中。戦況はどちらも五分五分といった状態だった。

そんな混沌としたある月の無い夜。

恐れていた事件が起こった。

当時宮仕えしていた従者や使用人の中に隣国のスパイが潜んでいた。

彼らの目的はただひとつ。

『国王一家暗殺計画』。

当初は情報収集や情報操作の為に送りこまれた彼らだが、国王夫妻に跡継ぎが産まれた為、急きょ指令が下りたのだ。

その日は王妃の誕生日でもあり、王宮内はお祝いムードで警備が手薄になっていた。

彼らはその隙を突いた。

国王夫妻の寝室に襲撃後、混乱に乘じ赤ん坊も殺害するはずであったが、赤ん坊は寝室にいなかった。

実は赤ん坊はその日乳母の手により、別室いたのだ。

乳母なりに気をきかせかつもりではあったが、思わぬ事態で役に立った。

異変に気づいた乳母は、すぐさま王宮を脱出し、ひとまず神殿に避難した。

しかし敵の魔の手はすぐに迫り、絶体絶命の状況にあった。そこで神官は乳母にある提案をした。それは『赤ん坊を異世界に転送する。』という内容だった。

しかし、異世界に転送する魔法はただでさえ高度な魔法。

よほどの実力者でない限り、失敗するリスクが高い。

だが背に腹は変えられず、赤ん坊のみを転送することに決めた。できることなら、乳母も行きたいのはやまやまだが、複数の転送は失敗するリスクが非常に高い。

複数での転送ができるのは、王族クラスの者に限られた。

敵が侵入する直前に転送は成功し、乳母と神官は重症を負った。

だが、乳母の傷は深くそのまま命を落としてしまった…。

その後、スパイは全員捕まり処刑された。

神官はなんとか一命を遂げ、夫妻に深くお詫びを申した後、率先して赤ん坊の搜索に精を出した。

そう。

実は、この時赤ん坊がどこの世界に転送されたのか、神官ですら解らなかったのだ。

神官の実力も不足していたのも原因の一つではあったし、何より当時は一刻を争う時。ランダムに選ぶほか方法がなかったのだ。

そして15年。

一つ一つ丁寧に異世界を外から見回ること15年。
星の数ほどある異世界からようやく見つけたのだ。

赤ん坊は大きく成長し少女から大人に変わろうとしていた。
見つけたことは嬉しいのだが、時は既に遅し。
なんと左足がなかったのだ。

神官は己に力がなかったからこうなつたと悔やんだが、どうやら事情が違った。

事情を知った神官は、その事実を王妃こと現女王陛下に伝えた。
そして女王陛下は我が子をこの世界に転送することを命じた。

母親として、女王として伝えるべきことがあるから…。

こうしたソラはこの世界に転送されたのだ…。

会議後、ルードは女王陛下に会議の様子を報告するため、後宮の一番奥の部屋に向かっていた。

——あゝ…やっと終わったあゝ。

たく、結局今日も肝心なことは後回しにして…ホント時間の無駄だ。

ルイードの言うとおり、貴族達はグタグタと己の主張だけして、面倒な決めごとは全て保留にした。

本来ならばその場をまとめるはずの審議院長は、先月亡くなりその座は未だに空席であった。

ガヤガヤ

陛下の寝室の扉の前で、ある会話がルイードの耳に届いた。

それは…15年前のあの事件の話だった。

当時2歳だったルイードはよく覚えてないが、その頃の女王陛下はかなり憔悴しきっていたのを今でもよく覚えている。

——だが…何故急にこの話を…？

中からは3人の声が聴こえる。いずれも女の声だ。

1人は聞き慣れた女王陛下のお声。もう1人は母の旧友であった現宰相の声。

もう1人は…。

ルイードの脳裏に浮かんだのは、昨日わざわざ異世界まで迎えにいった娘…。

——…なるほど。

ルイードは全て理解した。

——おそらく、アイツに全てを話しているのだろう。

事前に事情を知っていたルイードは、すぐにわかった。

だが、一介の騎士が何故王家のトップシークレットを知っているのか…そこには深く絡み合った血の流れがあった…。

『そんなこと…私には無理ですっ！！！！』

扉から大声が響いた。

ルイードは近衛兵としての義務を果たすべく、扉を開けた…が、

どーん

ルイードが扉を開けたと同時に中から人が出てきて、ルイードとその人はぶつかり、互いに吹っ飛ばされた。

「イテテ…オイお前…。」

ルイードは自ら体を起こすと、相手の方に目をやった。

ルイードの目に入っ たのは、黒髪に黒目の少女。

昨日連れてきた娘だ。

「イタタ…あっ！…！ごめんなさい！…！…ってあーっ！…！」

娘はルイードの顔を指差し叫んだ。

「昨日の性悪コスプレ騎士！…！」

「誰が性悪だ！！誰が！！」

——まったく……コスプレってなんだ？

娘はあわてて口をふさぎ謝った。

——ふん。当然だ。

「あらあら、ルイードまでどうしたの？」

入り口で騒いでるのに気づいて女王陛下がやってきた。

「はっ！申し訳ありません、女王陛下っ！…！」

最上級の敬礼の前に、女王陛下は二人を招き入れた。

7・15年分の愛／その2

部屋の中は微妙な空気に包まれた。

女王陛下はベッドに座り、先ほどからうつむいている。

何故かこの場にいた宰相のアンジャビス様は、難しい顔をして黙っている。

んで、どうみてもこの空気を作った張本人ことソラは、アンジャビス様の向かいのソファーに座り、同じく黙っている。

俺は職務中のこともあり、ソファーに座らずその様子を眺めていた。

だが…あまりにも空気が重すぎため、直接張本人に問い詰めた。

「オイ。一体何があったんだ。」

「まあ…色々ありまして…。」

「色々とは？」

「…てゆうか、あのさ。なんで貴方に言わないといけないわけ？
大体貴方、初対面からずっと私のこと呼び捨てだし…。
理由が知りたいなら、まず自分の名前を名のって。」

——こいつっ！！！

「お前…俺様が誰か聞いてないのかっ！！！！」

「もちろんよ!!」

当然のようにソラは答えた。

「ああ、忘れてましたね。」

アンジャビス様は思い出したように、顔を上げた。

「彼は『ルード・ジェネソン』。ジェネソン将軍のご子息です。ソラ様から見れば…又従兄弟に当たります。」

「Σえっ！？親戚??」

「やつと思い知ったか。愚か者。」

お前の父親である前国王と、母上が従兄弟なのだ。」

そう告げると、ソラは粗か様嫌そうな顔をした。

気を取り直して、ソラに事の始まりを質問した。

「どうして私を呼び出したのか理由を聞いたの。」

時間は数分前に戻る…。

いまいち実感が湧かないのが事実だ。

ぶっちゃけた話、目の前にいる人が実母なもの、私が異世界のオヒメさまなもの…

全てが理解できなかった。

でも、私に血の繋がりをもつ家族がいるという事実は、この上なく嬉しい…。

15年たった今でも、私の存在を忘れないでいてくれたことは、言葉にできないくらい心が満たされていた。

出生の話が終わった後、お母さんと私は向かい合うようにソファに座った。

お母さんは緊張した表情だ。

「ソラシア…いえ、ソラ。貴女に大切なお話があります。

既にユーリから聞いたとは思いますが…、はっきり言うと貴女に王位を継承…つまり次の女王になって欲しいのです。」

「お言葉ですが、それは無理です。」

私は即答した。

お母さんもユーリも当然の返答だと、理解してるみたいだ。

それでもお母さんは諦めない。

「私には…時間がないのです。

私は元から体は強くありません。現在も女王とは名ばかりで…実際は職務放棄です。

この国は荒れてます。

それは政治の面だけでなく、福祉や教育等も同じです。

貴族たちは、王家の人間ではない私を非難し、好き勝手し放題です。

でも…グレジデント王家の血を直系で受け継いでいる貴女ならどうでしょう？

彼らはきっと非難できないはずですよ。

お願いします。ソラ。

どうか…この国を救って!!」

必死の表情でお母さんは訴えた。

私は困惑した。

正直な話、今まで親孝行なんかしてなかったから、私に出来ることならしたかった。

でも…

あまりにも荷が重すぎる。

女王なんて私には無理だ。

今まで普通の女子高生として生活してきたのに、急に異世界。しかもオヒメサマ。

話が飛びすぎだ。

そう考えたら、急に元の世界が恋しくなった。

学校の友達はどうしてるか…

孤児院のみんなは大丈夫なのか…

考えだしたらきりが無い。

「私は…元の世界に戻れますか…？」

二人は表情が険しくなった。

「ソラ様…実は、魔法の発動中何らかの事故により魔法は暴走。現在修復が完了する目処は…立っておりません。」

——…それは…いわゆる…

「私は…帰れない…ですか？」

それは、私にとっての『死刑勧告』そのものだった。

体から力が抜けた。

泣き叫ぶとかそんな体力はなかった。

ただ、その事実を必死で理解しようとした。

頭では理解したが、体はそれを拒んだ。

目からは涙が溢れ、声を出さないようにするのに必死だった。

お母さんは私を抱きしめようとしたが、私は拒んだ。

体が急に拒否反応を示すようになった。

なんとか泣き止むと、ユーリは言った。

「…今現在、問題を打破できないならば、私達に力を貸してはいただけないでしょうか？」

…ソラ様。」

私の中で何かが切れた。

「そんなこと…私には無理ですっ！！！」

そう言って出ていこうとしたら、アノ性悪コスプレ騎士にぶつかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5554x/>

片翼の鶴は、空を翔べるのか？

2011年11月4日11時08分発行